

氏名	周明芳 (学籍番号 08D005)		
学位の種類	博士 (看護学)		
学位記番号	第5号		
学位授与年月日	2011年9月21日		
論文題目	中国都市部におけるNICUに入院した早産児の母親への育児支援プログラムの開発		
論文審査担当者	委員長	濱松 加寸子	教授
	委員	川村 佐和子	教授
	委員	渡邊 順子	教授
	委員	市江 和子	教授
	委員	藤本 栄子	教授

論文要旨

I. 研究の背景

中国のNICUでは、治療優先、感染への危惧等の理由から家族の面会は制限され、児の退院まで両親でさえ児との接触機会は殆どない。このような状況では、母親は児への関心が育ちにくく、退院後の児に積極的な関わりを取ることが難しい。また、専門職からの育児指導は殆どなく、母親は育児に関する知識や技術がないまま退院後の育児に臨む。さらに、新生児に対する医療保険制度が整っていないため、児の入院費用に対する親の経済的負担は大きく、「サイン退院」する児が少なくない。このような脆弱な児は退院後に命を失う危険性があると考えられる。

II. 研究目的

中国におけるNICU入院早産児を持つ母親が、児の命を守り、児の正常な成長・発達に向けた育児を可能にするようなケア能力を促進し、主体的な育児を実践するための育児支援プログラムを開発し、そのプログラムの有効性を検証することを目的とした。

III. 研究方法

- 研究デザイン：準実験研究であった。
- 研究対象：早産でNICUに入院し、在胎34週以降、単胎、出生体重1800g以上の早産児の母親で、母乳育児を希望し、中学校卒業以上の学歴を有し研究同意が得られた母親とした。ただし、経産婦、先天異常や重篤な合併症を有する児の母親、並びに重篤な合併症のある母親を除外基準とした。
- 育児支援プログラムの開発：予備調査の結果及び先行研究を基に育児支援プログラムの試案を作成した。プログラム試案は、早産児の母親のケア能力向上に焦点を当て、成人学習理論に基づいた育児に関する認知的、教育的、情緒的、社会的支援内容を構成要素とし、病室訪問、家庭訪問、電話訪問、電話相談などの支援方法を用いて母親の産褥入院中、母親の退院日、児の退院日、児の退院後3日以内、10日及び1カ月の6回の看護支援を設定した。試案に従って行ったプレテストの結果を受け、試案に母親の目標および支援内容・方法を一部修正・追加したものを開発した育児支援プログラムとした。
- 育児支援プログラムの効果の検証
 - データ収集方法：便宜的抽出法を用い、NICU入院の順で研究に同意した早産児の母親49名を介入

群（23名）と対照群（26名）に分けて実施した。介入群はプログラムに沿って実施し、対照群は病棟の通常看護を受ける。測定用具は、研究者が作成した育児行動達成状況質問紙、母乳育児効力感尺度（BSES）、不安自己評価尺度（SAS）、抑うつ自己評価尺度（SDS）を用いた。測定時期は、母親の産褥入院中（介入前）、児の退院後3日目、1カ月時点の3回であった。また、介入群の母親に全介入終了直後にプログラムへの評価に関する聞き取り調査を行った。

2) データ分析：分析はSPSS18.0を用い、データの性質や正規性、等分散性を検討したうえで検定方法を選択した。

3) 倫理的配慮：聖隷クリストファー大学倫理審査委員会の承認を得たうえで実施した（承認番号10025）。

IV. 結果

1. 調査の概要：中国重慶市にある医科大学附属病院のA、B、Cの3病院で行った。介入群と対照群の母親の基本属性は両群に有意差はなかった。

2. プログラムの効果：①育児行動達成状況の比較：介入群の児の退院後3日目の育児行動達成状況は、対照群に比べ、育児技術、観察・判断、対処行動の項目で、概ね有意にできた。1カ月時には、退院後3日目に比べ、概ね同じ項目で介入群は対照群より有意にできた。②BSES得点の比較：児の退院後3日目に介入群のBSES得点は対照群より高かったが有意差はなかった。1カ月時には介入群のほうは対照群より有意に高かった。③母乳栄養率の比較：児の退院後3日目及び1カ月時の2時点とも、介入群の完全母乳率及び混合栄養を含む母乳栄養率は対照群より高かったが有意差はなかった。④SAS及びSDS得点の比較：この2つの項目について、介入群と対照群の群間そして時期に主効果を認め、対照群より介入群のSAS、SDS得点有意に低かった。また、1カ月時では介入群の抑うつ症状の検出率は対照群より有意に低かった。⑤母親の健康状態の比較：児の退院後3日目及び1カ月時の2時点とも、対照群の乳房トラブル発生率は介入群より有意に高かった。体調不良は2時点とも両群間に有意差はなかった。⑥児の健康状態の比較：対照群の児の退院後1カ月時の外来受診率は介入群より有意に高かった。児の再入院率については、介入群より対照群のほうはやや高かったが有意差はなかった。⑦プログラムに対する母親の評価：全員から肯定的な回答が得られた。

V. 考察

育児行動そのものは本能ではなく、学習によって習得されるものと言われている。成人学習理論に基づき、母親に育児に関する知識や技術、そして保証、励まし等の支援を提供する本育児支援プログラムにより、母親の育児に関するケア能力が高まった。このケア能力の向上が、主体的な育児行動の実践や子どもの健康維持に繋がったと共に、母親自身の情緒安定の一因となったのではないかと考えられる。

VI. 結論

本プログラムの実施により、①母親の育児実践力、育児に関する観察・判断力及び対処行動の達成状況は概ね有意に達成できた。②母乳栄養率に差はなかったものの、母親の母乳育児効力感が有意に高まった。③母親の不安・抑うつが有意に軽減できた。④母親の乳房トラブル、児の外来受診率が有意に低かった、といった結果が得られ、本プログラムはNICUに入院した早産児の母親への育児支援に有効であると認められた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、NICUに入院した早産児をもつ母親が、児の退院後、児の命を守り、主体的な育児を実践するための育児プログラムを開発し、その有効性を検証しようとしたものである。予備調査を行った後、介入群23名に対し病室訪問、家庭訪問、電話相談等の支援方法により、ひとりに対し合計6回の看護支援を実施した。膨大な中国語の生データの和訳に妥当性を保つため、日本語・中国語に精通している医科系の中国入大学教授の指導を受け、分析が丁寧かつ地道に行われていた。

中国におけるNICUの現状は医療保険制度が整備されておらず、入院する必要があるにもかかわらず、経済的負担から親の意思により「サインして退院」することが多い。そこで研究者は育児支援プログラムを開発し、看護師ができることから子供の生命の安全と健全な発育を図ろうと着眼している。今回開発された育児支援プログラムは日本においては既に実施されている内容であるが、中国においてはこのような発想による育児支援プログラムは未だなく、新規性に富む内容となっている。このプログラムの評価から判断すると、子供の生命や成長に関する有効な役割だけでなく、母親にとっても子供を喪失する不安や悲しみから解放され、自身の育児力を上げていくことができる点に意義が見出されている。

本研究は、NICU看護の改善や重症な症状を持って生まれてきた子供にとっては生命の安全確保、そして母親にとっては、子供の喪失予防と育児力の向上という諸点において研究の価値が高いことを確認した。とくに、中国における価値は重大であると考えられた。本研究成果は我が国においては新規性に劣るかもしれないが、我が国と異なる環境の中における価値の大きさに目を向けることが重要である。

研究課題を含めた若干の修正点を助言し、再提出された論文を委員全員で確認した。

以上結果から、審査員会委員全員により、本論文が博士（看護学）の学位を授与するに十分価値があるものと認められた。